



明治学院大学機関リポジトリ
<http://repository.meijigakuin.ac.jp/>

Title	アーノルト・シェーンベルク オペラ 《モーセとアロン》：集合体という人格の表象 合唱による表現の可能性
Author(s)	阿久津, 三香子; AKUTSU, Mikako
Citation	
Issue Date	2017-04-21T04:56:14Z
URL	http://hdl.handle.net/10723/3013
Rights	

阿久津三香子 博士学位（課程博士）審査報告

2017年2月8日

審査委員長 望月 京

表記の博士学位審査請求に関し、審査委員会による論文審査と協議の結果、合格と判定しましたので、ここにご報告いたします。

請求者氏名 阿久津三香子

論文名 アーノルト・シェーンベルク オペラ《モーセとアロン》：
集合体という人格の表象 —合唱による表現の可能性—
*Opera Moses und Aron of Arnold Schoenberg : representation of a character as
the mass —possibility of the expression by a chorus—*

審査委員会

委員長	望月 京	(文学部教授)	印
委員	岡部 真一郎	(文学部教授)	印
委員	長谷川 一	(文学部教授)	印
委員	和田 ちはる	(文学部専任講師)	印
委員	樋口 隆一	(文学部名誉教授)	印

I 審査内容

1. 論文の趣旨と構成

阿久津三香子氏の課程博士学位申請論文「アーノルト・シェーンベルク オペラ《モーセとアロン》: 集合体という人格の表象 —合唱による表現の可能性—」は、A4版203頁(本文194頁)の論文である。本論文の構成及び文献一覧など、形式面は課程博士学位論文としての体裁が十分に整えられている。そこで、以下では内容面の検討に入る。

本論文は、シェーンベルクのオペラ《モーセとアロン》において、民衆役を担う合唱パートに特に焦点をあて、その性格および役割が、カンタータとして着想された作曲当初からオラト

リオを経て最終的にオペラとなる過程でいかに変化したかを、テキストと音楽の両面で詳らかにする。それにより、遠い旧約聖書の時代の物語と作曲当時の社会状況とを重ね合わせようとしたシェーンベルクの意欲的な試みが明らかにされる。阿久津氏は、作曲者がその若き日に合唱長を務め、当時隆盛していた労働者合唱団の活動にも注目し、彼らの愛唱歌の歌詞とオペラで最終的に採用されたテキストとの間に共通のキーワードを見出す。さらに、それらのキーワードと、当時広く読まれ、シェーンベルクの蔵書でもあった『群衆心理』（ギュスターヴ・ル・ボン著、1895年）の記述との間に類似点を認め、作品に、「時代性」を織り込まんとした作曲家の取り組みを多層的・多面的な分析によって解明することに成功している。

本論文の目次は、以下の通りである。

序論

- i. 本論のねらい
- ii. 本論の構成

第 I 部 束縛から自由へ オペラ《モーセとアロン》と労働者合唱のテキストにおける共通項

第 1 章 労働者合唱とアーノルト・シェーンベルク

第 1 節

- i. 19 世紀後半ウィーンおよびニーダーエスターライヒの労働者合唱運動 概説
- ii. 19 世紀後半ニーダーエスターライヒにおける労働者運動の揺籃から黎明

第 2 節

- i. 若きアーノルト・シェーンベルクの労働者合唱団での合唱長活動 —先行文献からの整理—
- ii. 「労働者歌唱協会メードリング」リーダーターフェル・プログラムと「ニーダーエスターライヒ労働者歌唱協会連合連盟祭」

第 2 章 労働者合唱団で歌われた合唱曲の歌詞内容とその傾向

第 1 節 「ニーダーエスターライヒ労働者歌唱協会連合連盟祭」

予告プログラム掲載の合唱曲 —歌詞内容と傾向—

第 2 節 『ドイツ労働者歌い手連盟 無伴奏男声合唱曲集』所収の合唱曲 —歌詞内容と傾向—

第 I 部 まとめ

第 II 部 オペラ《モーセとアロン》 集合体という人格の表象

第 1 章 アーノルト・シェーンベルクの第 3 期ベルリン時代 概要

第2章 オペラ《モーセとアロン》成立前史 概要

第3章 分析

第1節 テキストの変遷

- i. 聖書との隔たり — 先行文献を手がかりとして —
- ii. オラトリオ・タイプ原稿（資料 TC）とオペラ・タイプ原稿（資料 TK1）の照合
 - (1) 構成
 - (2) テキスト内容の異同
- iii. 民の属性
 - (1) 「目に見えぬ神」と「自らの姿を私たちにお示しにならない神」
 - (2) ギュスターヴ・ル・ボン『群衆心理』
 - (3) 像の多用
 - (4) 『群衆心理』とオペラ《モーセとアロン》にみられる類似点

第2節 オペラ《モーセとアロン》 集合体という人格の表象

- i. 音列
- ii. 「選民のモチーフ」と「神の受け入れ表明の旋律」 — 民と神のつながり —
 - (1) 「選民のモチーフ」 — 「あらゆる民のなかから選ばれた」 —
 - (2) 神とのつながり
 - (3) 「神の受け入れ表明の旋律」
 - (4) 「選民のモチーフ」と「神の受け入れ表明の旋律」
- iii. 「個々人の集合体」としての民
 - (1) 心理の変化＝心理的な移動 『神の受け入れ表明の旋律』による行進
 - (2) 心理状態の変化 第1幕第3場「モーセとアロンは民に神の福音を告げる」
 - (3) 心象の多様性 第1幕第3場「血の生贄」
 - (4) 感染と暗示 第1幕第4場「へびの奇跡」と「病の奇跡」

第II部 まとめ

結論

略号一覧、資料対照表、参考文献一覧

巻末資料1 オペラ《モーセとアロン》で使用されている音列 — 音列表 —

謝辞

2. 本論文の概要

本論文の内容を概観すると以下の通りである。

「十二音技法の創始者」として知られるオーストリア出身の作曲家アーノルト・シェーンベルク (Arnold Schönberg 1874~1951) のオペラ《モーセとアロン Moses und Aron》は、1930年頃からオペラとしての作曲が開始されたと推定される。テキストは全3幕構成だが、1932年に第2幕の作曲が終えられた後、第3幕の作曲は進まず、未完に終わっている。

タイトルが示唆する宗教的な側面や、全体を司る十二音技法、ライトモチーフの有無などに焦点をあてた先行研究は多数存在するものの、オペラの中で民衆役を担う合唱パートを中心に論じた研究は未だ少ない。阿久津氏は、1923年頃、カンタータとして着想されたこの作品が、最終的なオペラの形態に落ち着くまでの構想やテキスト内容の変遷に着目し、「原作」である、旧約聖書の「出エジプト記」との相違も踏まえて、登場人物たちの性格や役割がシェーンベルクによっていかに書き換えられ、それがいかなる意図によるものかを明らかにしようとする。

本論文はII部構成であり、第I部では、若きシェーンベルクの労働者合唱団での活動を鑑み、特に彼が居を構えたウィーンやベルリンで実際に接点のあった労働者合唱団の動向や、彼らが当時歌っていた合唱曲の歌詞に注目し、当時、シェーンベルクが接した現実の「民衆」と、オペラの合唱パートの「民」との関連を検討する。

第1章では、19世紀後半のウィーンと、ウィーンをとりかこむような位置関係にあるニーダーエスターライヒ州における労働者合唱運動を概観し、20代前半であったシェーンベルクが労働者合唱団での合唱長活動につくまでの来歴や、そこで歌われた作品などが紹介される。

第2章では、「ニーダーエスターライヒ労働者歌唱協会連合連盟祭」の予告プログラムと、ベルリンで1929年に出版された『ドイツ労働者歌い手連盟 無伴奏男声合唱曲集』(シェーンベルクが連盟芸術顧問のアルフレート・グットマンから依頼されて作曲した《幸福 Glück》も収録されている)をもとに、労働者合唱曲の歌詞内容と傾向を分析・検討する。

その結果、少なくともシェーンベルクと接点のあった労働者合唱協会や連合・連盟で歌われていた合唱曲の歌詞内容には、ある種の標語とも言い得る共通のテーマがあったことが明らかにされる。「束縛から自由へ」というその共通テーマを、大勢の労働者たちが一堂に会して大合唱していることを、シェーンベルクは合唱長として身をもって知っていた。オペラ《モーセとアロン》第1幕第4場における「民」の、「全ては自由のために! 鎖を打ち砕け!」とのシュプレヒシュティンメと、こうした当時の労働合唱曲に頻出する「自由」「鎖を打ち砕け」といった歌詞との相似から、《モーセとアロン》の「民」は、「出エジプト記」で伝えられる民の姿とは異なり、作曲当時の現実の人々の姿を投影したものであったことが説明される。

第 II 部では、当初カンタータとして着想された《モーセとアロン》が、オラトリオとしての構想を経てオペラとなるまでの過程を追い、テキストの変遷や音楽の分析から、「民」がいかなる性格・属性をもつものであるかを明らかにする。

第 1 章では、オペラ《モーセとアロン》創作期にシェーンベルクがおかれていた状況を概観し、第 2 章で、カンタータからオペラへと至る過程を辿り、特にオラトリオからオペラへの構想の変更には、オペラ創作への内的欲求だけではなく、オラトリオとしての出版を断られたなどの外的要因も関係していた可能性を示す。

第 3 章は、オラトリオからオペラへの構想変換の過程で膨大な修正と推敲が重ねられたテキストの変遷を、草稿や、ベースとなる旧約聖書「出エジプト記」の記述とも比較しながら場面ごとに辿り、描かれるモーセ像や「民」の異同を指摘しつつ、シェーンベルクがオペラの中で表現しようとした問題を提示する。たとえば、聖書の「民」は、従順にモーセとアロンの兄弟や彼らが伝える神を信じるのに対し、オペラでは、兄弟にも神にも不信感を抱く個々の民の意見や感情、心理状態の揺らぎによって構成される場面が独自に挿入されている。奇跡の行い手や受け手、それによる作用や解釈などにも本質的な相違が見られ、それにより、「目に見える証しがなければ理解できない」性質のオペラの「民」は、「我が目で見た奇跡を通じてようやく兄弟や神を信じ始め、最終的には荒野へと向かうことを、ファラオの命ではなく自ら決断する」ような、より主体的、感情的で、時に暴力的な存在として描かれていることを明らかにする。

こうした「民」の性質は、「目に見える像の是非」という、長年シェーンベルクが取り組んできた主題（偶像崇拝が禁じられるユダヤ教徒にとって重要な問いでもある。ユダヤ人であるシェーンベルクはキリスト教徒として育てられるが、《モーセとアロン》の作曲中にユダヤ教に改宗している）や、当時少なくともフランスやドイツ語圏で広く読まれ、シェーンベルクも所蔵していた、ギュスターヴ・ル・ボンの著作『群衆心理』の中のいくつかの記述と関連づけられる。ル・ボンによれば（以下「」内の引用は阿久津氏の訳に基づく）、「衝動性、昂奮し易さ、論理的思考力のなさ、判断力および批判精神の欠如、感情がみなぎり溢れている」群衆は、「像を通じてでなければ考えることができず、また像によってのみ影響を与えられる」。ル・ボンはまた、「言葉の真実の意味とはまったくかわりがなく、「意味がまったくもって定かではない」のに「言葉によって喚起される像」が「しばしば極めて大きな効力をもつ」例として、「民主主義、社会主義、平等、自由などの表現」を挙げている。阿久津氏は、民が心を動かし、今まさに行動を起こそうとするオペラ第 1 幕の終結場面において、シェーンベルクが、シュプレヒコールのように民が唱和するテキストを新たに組み込み、その冒頭で、同じくオラトリオのテキスト原稿では一度も用いていない「自由」という、ル・ボンが「極めて大きな影響力をもつ言葉」として挙げた語を使用したことに注目し、19 世紀後半から 20 世紀初頭のドイツ、オーストリアにおいて、「自由」という言葉が、確かに、人々にとって求心力ある言葉であり続け

ていたことを、シェーンベルク自身が労働者合唱団での指導経験などを通じて認識していたとの第Ⅰ部の記述を改めて喚起する。

こうした書き換えにより、聖書上の、時間的・空間的に限定された世界の物語が、より幅広く多様な解釈の可能な物語として成立するよう、綿密に準備されていることを論証した上で、これらのアイディア（民の性質、言葉や感情の感染、神と民との関係性…）が音楽上にいかに反映・表現されているか、音列や音型の引き継ぎ・共有、オーケストレーション、音程、音色、リズム、作曲技法など、さまざまなパラメータの分析内容を譜例を用いて具体的に示し、最終的に、「神と民」「神と邪」など、対照的にも見える存在が、そもそもつながった、ある部分では一心同体の存在であることを解明する。

作曲者の生前には全曲初演が叶わなかった本オペラであるが、近年の異なる演出による初演・再演の例を挙げ、合唱表現を通して民衆という集合体を巧みに描き出すことで、シェーンベルクは旧約聖書を下敷きとしながら、現代にまで通じる民衆の姿をも映し出すことに成功し、その結果、作品も、時空を超えて聴衆に受容されるようになったとの結論が導かれる。

3. 論文の評価

A. 本論文の目的とその到達点

オペラ《モーセとアロン》については、前項でも言及したように、さまざまな視点から多くの研究がなされている。本論文は、それらの先行研究を含め、作品のテキスト、楽譜、草稿など、各種資料を幅広く渉猟し、作曲当時の時代背景や社会状況、またシェーンベルク自身の身辺状況をも鑑みた多角的な分析と考察の結果、テキストの変遷と音楽上（作曲技法、管弦楽法、音楽的象徴など作曲上）の仕掛け、作劇上のドラマトルギーから、深層にある作曲家の意図や欲求を読み解くことに成功している。

特に、最終的に決定されたオペラ・テキストに、若き日のシェーンベルクの労働者合唱団での経験を読み取り、さらに、その中の「民」の性質に、当時幅広く読まれ、シェーンベルクの蔵書でもあった、ギュスターヴ・ル・ボンの『群衆心理』の中で述べられる「群衆」のすがたとの類似を見出し論じたのは、阿久津氏がはじめてであろう。

ロマン派以降、作曲家が個人的な「内的葛藤」を音楽に投影するようになり、シェーンベルクらが推進した十二音技法による「難解な無調音楽」の時代以降は、「知的音楽」がさらに社会性を失ったとされて久しいが、シェーンベルクは、彼が自らの体験を通して学び取った「民衆」というものの本質を、これもまた自ら学び取り、結果として「階層脱却の方途」ともなった作曲家としてのメチエをもって、安易に既存音楽を引用することなく、「オペラ」という最もブル

ジョワ的な音楽の器に反映させることに成功した。本論文は、それによって作品が獲得した恒久性を論証し、作品の持つ「時事性」だけでなく、作品を通して作曲者自身の社会観を露呈させることにも成功している。非常に意義深い労作である。

B. 本論文の課題

もともと、本論文でなされる論考の出発点および到達点として、より深い理解や考察を求めたい点がないわけではない。たとえば、「時事性が最重要とされた 1920 年代における音楽への要求」についてである。なぜ、誰によって、「時事性」がそれほどまでに求められたのか？本論文中、それに対応する理由は、「科学技術の目覚ましい発展により、人々の実生活そのものも、そこで聞かれる音響も急速に変化」したこの時代において、「聴衆の趣味趣向も大いに変わった」としか述べられていない。また、そうした時代の要求に沿った作品を意識したのであれば、シェーンベルクはなぜ、たびたびの構想変更にもかかわらず、旧約聖書の物語を下敷きとすることだけは変更しなかったのかとの疑問も残る。『群衆心理』のような著作が登場した背景からも、聴衆層そのものの変化を考慮に入れ、論じられる部分があって然るべきであったろう。

『群衆心理』で論じられる「群集」とオペラの「民」との類似についても、発見そのものは興味深いのが、関連づける根拠がテキストだけなのは些か視野狭窄であり、そのテキストも、著者がやや恣意的に解釈している部分がないとは言えない。言葉だけでは見えて来ない部分を俯瞰的にとらえて考察することが必要であったはずである。

「自由と解放」というテーマは、労働者合唱団だけでなく、歴史的に見ても、多くの集団の主張にみられるキーワードであり、オペラの民の歌詞に見られる暴力的な側面は、時代状況を鑑みれば、むしろ 1920～30 年代にはあちこちで見られた、ナチ寄りの集団とみる方が説得力があるのではないか。そうした点についても、今後、上に述べたような、より広い視野からの考察が課題として求められる。

II 審査結果

1. 論文予備審査結果

2016年9月28日に提出された本論文の審査にあたり、5名からなる審査委員会が組織された。そのうち、審査委員長の望月を含む3名による論文予備審査が2016年11月16日に行われ、審議の結果、引き続き口述試験（論文本審査）を実施することが決定された。

2. 口述試験結果

2017年1月13日、審査委員会において、阿久津三香子氏の博士学位請求論文に基づく口述試験（論文本審査）が実施された。

口述試験においては、前項 B で記した課題に加え、文章表現上の問題、資料の使い方、「群集」の解釈などに関して疑義が呈されたものの、全体的な分析の緻密さは高く評価されるべきものであり、それに基づく間口の広い作品解釈も含め、本論文は課程博士論文として十分なレベルに達しているとの結論に達した。

口述試験の後、審査委員会による合否審査が行われ、合格と判定された。

以上